

有田内山グランドデザインを発信する

ウチの うちやま新聞

Vol.1 町長インタビュー編

Interview

話し手 = 松尾佳昭氏（有田町長）

聞き手 = 松田愛也（佐賀大学）

テーマ グランドデザインとは？

令和4年3月に策定された有田内山グランドデザイン。策定までには、誰がどのような想いを抱え、どのような意見交換が行われたのか。その裏側を探るべく、初号は、**松尾町長にグランドデザインに対する想いを伺ってきました。**

令和4年3月策定 有田内山グランドデザイン

内山地区のまちづくりの将来像、並びに「札の辻周辺」の遊休地と施設の活用を念頭においた**地域活性化の実現に向けた施策**を示すもの。



↑ここから見られます



Fig.1（左）有田内山グランドデザインダイジェスト版
Fig.2（右）札の辻周辺将来イメージ
（引用＝有田内山グランドデザイン）

01 グランドデザインにける想い

テーマ① グランドデザインとは

内山地区にとっては 100年に一度のチャンス！

ー有田内山グランドデザイン構想とは何か、お聞かせください。

松尾 きっかけは、札の辻の佐賀銀行の移転です。あの場所は、歴史的にも、地区の中心にあるという意味でも重要な場所だったので、跡地を活用するために町で取得しました。取得したから、じゃあ、観光施設を建てましょうとか、安易に考えれば楽だけど、それでは勿体無いと思っています。窯業の売り上げが減少する、人口減少している、子供も減っているという現代において、どうしていくのか、ここはみんなの話をしっかり聞いて、決めていかなくてははいけない。「グランドデザイン構想とは何か？」という答えになってないかもしれないけど、町の方々と一緒に内山地区のこれからを議論する、100年に一度のチャンスだと思っています。それが、有田内山グランドデザイン構想。

ー跡地っていうのがあったことがきっかけでしょうか？

松尾 いえ、元々内山地区全体を考えたいというのは思っていて、佐賀銀行跡地の活用を考えなければならないというのが、物事のきっかけで、スタートになると思っています。

ー跡地の計画を、あえてまちの全体構想を考えるきっかけにしようということですね。

松尾 内山地区は伝建地区に指定されていますので、佐賀銀行跡地に突拍子のないものを建てても仕方がない。あの場所を起点に、小さな点が繋がっていく必要があると考えています。佐



Fig.3 インタビュー中の様子（左＝松田、右＝松尾町長）

賀銀行跡地から陶山神社へのアプローチ、泉山や白川へのアプローチっていう風に、色々な物語の中心として捉えています。内山地区の人たちの生活も陶器市などハレの日もある場所になっています。町の人々の心の寄りどころとして大切に考えていきたい全部の中心ですね。

テーマ② どのようなプロセスで策定された？

複数の見方があったからこそ 深まっていった議論

ー令和2年10月に有田内山グランドデザイン会議を立ち上げられましたが、会議体を作る時に、どういった方々にお声かけされたのですか。

松尾 委員選考に関しては、窯業界の団体の代表者など多方面の方に委員をお願いしました。加えて、建築・まちづくり・デザインの専門家や有識者など、これまでまちづくりに関わってこられた方です。客観的に有田内山に対してガンガン意見を言いつつも、町の声聞き、それらをどこかでうまくまとめてくれる人を選びました。委員長にはアルセッドの清水さん、副委員長には香蘭社の深川さん、その他委員には、今右衛門先生、スピングラス・アーキテクツの松岡さん、篠原溪山の篠原さんなどをお願いしました。内山に暮らしている、もしくは商売している若者の声を聞くことも、これからの町を考える上で大事だと思っていました。検討部会は、30～40代を中心に作りました。部会の取りまとめは、委員会メンバーでもあるプロモダクションの浜野さんとワークショップなどに慣れているUMAデザインの原田さんをお願いしました。



Fig.4（左）引用＝有田内山グランドデザイン

ー会議はどのように進められていったのでしょうか。

松尾 委員会は計6回。初めからテーマが決まっていたわけではなく、現状と話しながらというところですね。委員会では、委員メンバーそれぞれの立場からのおもしろいコ

メントが多く、そこから議論が広がりました。例えば、松岡さんからはマルシェや実証実験という、中々住んでいる人からは出てこない意見もありました。一方、部会は、6回の委員会の間に4回開かれました。部会からは住んでいるからこそそのコメントが多くありました。防災、子供たちの教育など、普段、個人個人で考えていることが素直にでた良い機会だったと思います。6回が多いか少ないかといううと丁度良かったです。色々なキーワードが出てきていましたので、意見が出尽くした印象があります。

Table.1 各会議のスケジュールとテーマ

回	日付	テーマ
1	R2/10/30	策定に向けた組織承認
2	R3/03/12	内山通りの賑わいづくり 観光施策の現状課題
3	R3/06/21	住みたいまちづくりについて 定住・住環境対策の現状課題
4	R3/08/26	部会の内容報告 これまでの課題整理
5	R3/10/25	施策展開の取り組み 札の辻周辺に必要な機能
6	R3/12/20	部会の会議報告 グランドデザイン素案の協議

テーマ③ 会議であがった委員会と部会の意見

Q 大事なものは窯業 or 暮らし？ 町長の考えとは

ーこれまでの議事録を読み込んでみました。窯業関係者からは、やっぱり窯業、商業として活気があることが大事だという声大きい一方、若い方々からは、暮らしやすさや、有田内山での教育など、暮らしが大事という意見が大きい。そこら辺、町長はどうお考えですか？

松尾 有田町として考えると、町全体を考えなければならないけど、内山地区に限って言えば、焼物業界が元気じゃないと、という意見が出てくるのは当然のことですが、部会からは仕事、教育環境を含む暮らしというキーワードが出てきました。まちづくりとしては、どちらも大事ですね。ーグランドデザイン報告書の中で、移住・定住といったキーワードが先に出てきているのは、何か意図が…？

松尾 グランドデザインの報告書では、満遍なく意見を集約して書かれているので、当たり障りなく、と見えてしま

うかもしれませんね。

一報告書では、暮らしに関して「移住」といったことも書かれていました。

松尾 私個人としては、移住・定住よりも関係人口、つまり有田に関わってくれる人の数が大事だと思っているので、正直それほど重視していません。二拠点居住のような新しい暮らし方、働き方が流行っています。そういう暮らしを考えた先に、移住・定住があると思っているので、個人的には、二拠点居住に可能性を感じています。

文化っていうのは、非常に私としては、キーワードだと思っています。

松尾 焼き物商売か暮らしかという問いに対しては、まずは、そこに暮らされている方に寄り添ったまちづくりをしなければいけないと思っています。ただ、泉山で、陶石が発見されなかったら、佐賀県の片田舎でしかないので、やっぱり窯業も大事だということ。焼き物を中心に町が形成されていった歴史がありますので、生活に寄り添った窯業というか、窯業に基づいた生活というか焼き物を中心としてきた 400 年の文化を経験してもらいたいですね。佐賀銀行跡地を含め、内山のランドデザイン構想を考える上で、「文化」というのは非常に重要なキーワードになると私は思っています。

テーマ④ 文化をきちんと伝える、伝達する

ちょっとわかんない方が丁度良い「文化交流施設」構想

一具体的に佐賀銀行跡地を含め、何を建てるべきか、お考えをお聞かせください。

松尾 400 年の歴史的に振り返ると、内山には元々、観光という概念はなかったと思います。陶器市も少し稼げればいいぐらいの感覚だったため、なぜ観光をベースにまちづくりを考えなければならないのか、疑問に思われる方が多いです。中には、観光も考えればっていう人もいますが、世代間の違いもありますよね。

一まちづくりの軸は、観光ではないっていう方と、いやいや

人にきてもらってこそ観光だよという方と、ギャップがあるように思えます。

松尾 観光地として有田に来てもらえるのは、内山に 400 年の歴史があるからだと思っています。観光は、有田の文化があるからで、文化交流をしていると、そこに観光が生まれているようなイメージ。だから、佐賀銀行跡地に何を建てるかという答えは、文化交流施設としています。あまり、観光によせて観光地化してしまっても、と思っています。



Fig.5 現在の佐賀銀行跡地の様子（撮影＝松田）

一町長のおっしゃる文化交流施設っていうのは、観光のための施設ではなく、有田の文化を知ってもらうための教育・学びの場のようなイメージでしょうか。

松尾 日本国内でも外国から遊びに来た方もまずはここに来れば、とりあえず有田のことがわかる！という場所になることも重要だと思っています。名称は、文化交流施設というちょっとわからないぐらいが丁度良くて。色々な機能が複合している建物で良いように思っています。食堂が入っていたり、ギフトショップが入っていたり。美術館だ博物館だと硬いものにしてしまうと意味がない。

一分かるようで分からないのですが（笑）、あえて、〇〇でもあり、〇〇でもあるといった表現をするとすれば、文化交流施設をどのように言い表されますか？

松尾 観光案内所でもあり、文化施設でもあり、町民の集いの場でもありということですかね。これからの時代、焼き物だけではダメなので、例えば、焼き物に付随する食文化。一般の周辺農家の方達から、ちょっと場所貸してくださって来て、町民だったら 1 日 300 円でよかですよみたいな。あと、若い子たちが、例えばパン屋さんを実験的にやりたいとか、実証実験の場でもあると思っています。

テーマ⑤ 拠点を繋ぐモビリティ構想

観光客と地域住民、それぞれの動線を繋ぐ施策

一内山地区は約 2km、歩けるようで徒歩だけで回るのはには限界がある。地区内のモビリティについて、どのようにお考えですか？

松尾 佐賀銀行跡地の文化交流施設を起点に町全体のランドデザインを構想したいというのがそもそものアイデアです。その中で、佐賀銀行跡地をファーストタッチの場として考えたい。イタリアのアルベルゴ・ディフューゾ（分散型宿泊）のように、街角案内人のようなコンシェルジュがいてくれればなっていう。ファーストタッチの場までのモビリティは、大きな課題です。有田駅からも上有田駅からもそれなりに距離があるので、将来的にはグリスロ（注 1）の導入なども検討していく必要はあると思います。

一内山に暮らすご年配の方々の移動手段も限られています。

松尾 グリスロは、観光客を想定して有田駅を起着として考えています。とりあえず有田駅から佐賀銀行跡地までの往復、地区住民の移動手段はコミュニティバスの本数を充実させることを、部署内で検討しています。長年の課題であった貨物トラックの通り抜けも、令和 9 年の 3 月に南原宿線ができるので、内山地区内のモビリティも改善できると思っています。

テーマ⑥ まちづくりの進捗について

これからどのように拠点を整備しどのように運営していくのか

一文化交流施設に、街角案内人のようなコンシェルジュをというお話がありましたが、建物が建ってしまったからでは、運営に関わる人の意見は反映されづらいのではないのでしょうか？建設のプロセス、運営のイメージ等、現状の進捗をお聞かせください。

松尾 町としては、建物整備は町で、運営に関しては指定管理なのか何なのかはまだ未定ですが、外部にと考えています。これまで、有田内山ランドデザインの報告書を公開し、どういった事業者が運営に興味を持ってくれるのか、

令和 6 年 1 月にサウンディング調査を行いました。実際、どのような機能が入り、どう運営するのか、可能性を把握するための調査です。

現在、こうした人材の掘り起こしと、これらをどのようにプロポーザル要件としてまとめていくのか、その調整をしている所です。佐賀銀行を解体して時間が経っていて、まだか？というお声があるのはわかります。作ってしまうのは簡単ですが、100 年に一度のチャンス、しっかりと着実にという想いがあります。

注 1 グリスロ：グリーンスローモビリティの省略。時速 20km 未満で公道を走ることができる電動車を活用した小さな移動サービス。

あとがき

「ウチのうちやま」新聞第 1 号はいかがでしたか？文化交流施設とは何なのか、グリスロの構想など町長個人としての具体的な構想を伺うことができました。個人的には、これまで出てきていた言葉のイメージが湧いてきて、これらが実装された数年後の有田内山はどうなっているんだろうと想像してワクワクしていました。

今後の新聞では、第 2 号では「生活利便性 - 滞在」、第 3 号では「窯業 - 体験」、第 4 号では「交通利便性 - まち歩き」をテーマに発行し、それぞれ新聞の内容に対して、皆様からのご意見を伺うワークショップを企画予定です。是非ご参加いただきたいと思います。よろしくお願いいたします！

初めまして、筆者です！

「ウチのうちやま」を企画しています、佐賀大学院建築環境デザインコース建築計画学

研究室、修士 1 年の松田愛也（まつだまなや）と申します。私は、市民参加型まちづくりにおける行政と地域住民間の効果的なコミュニケーションおよび意見交換の手法に着目しており、本企画は、新聞による情報発信とワークショップを組み合わせた実践研究です。詳細は、後日ワークショップで直接お伝えさせていただきたいと考えています。よろしくお願いいたします。

Instagram

ID : uchino_uchiyama

新聞やワークショップの予告をします！

